

「日本とスコットランドの高等教育比較研究」に関するアンケート

比治山大学教授 貝嶋 崇

本アンケートは、主にスコットランドで実施し48の回答を得た。イングランドの出身のものも含まれていたため、便宜上そのグループをイギリスと呼ぶことにする。設問1から8までは記述式の設問であり、イギリスの回答結果をまとめたものである。設問9から36までは番号選択の回答形式で、比治山大学で実施したものと、イギリスで実施したものとを比較し表にまとめて検討を加えた。設問37から39までは再び記述式で1から8のものと同じくイギリスのグループの回答をまとめたものである。

設問1 Why are you studying at university?

大学で教育を受ける理由として、一番多い回答は勉強するためで17あった。次いで、職業に就くために11、言語の習得が7、両親が薦めたからは3という結果になった。

設問2 What did you expect from the university when you passed the entrance examination?

大学に合格した時点で何を期待したかという質問の回答としては、高等教育が最も多く17で、次いで教育環境に期待しているが9、授業そのものが8だった。単位を取りたいという回答も3つあった。

設問3 To what extent were your expectations fulfilled?

入学後漠然と抱いていた満足度として、80%が最も多く13で、次いで、70%が12、100%が9、75%が8、50%が1という結果だった。この結果は満足度がかなり高いことを示している。

設問4 Are you satisfied with your university life?

大学生活への満足度としてyesが32で、noが0、どちらもいえないが2という回答だった。この結果は設問3と矛盾していないといえよう。

設問5 Could you explain what you are satisfied with when learning?

大学教育を受ける際に何に対して満足を得ているかを自由記述で回答してもらったところ、授業内容そのものに満足していると答えたものが最も多く24で、時間の自由度がその次で11、教員が10という結果になった。

設問6 What do you expect from university education?

大学教育で何を期待しているかと尋ねたところ、その回答として「授業と教育」と答えたものが最も多く24で、次いで「単位」であると答えたものが21だった。意外な回答として、「職業を得ること」が2つあった。

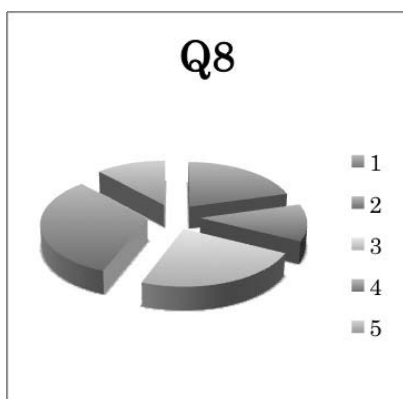
設問7 What was one of the most important factors when you decided on which foreign language to study at university?

大学で学ぶ外国語を決定する際の最大要因を尋ねた設問では、自分にとって得意な外国語を選んだとするものが最も多く19だった。次いで、個人的な興味のある外国語を選んだとするものが10、家族にその言語を話すものがあるというものが7で、実際にその国へ旅行したことがあるなどという個人的な経験が6、大学以前に学校で学んだ経験があるからとするものが5だった。

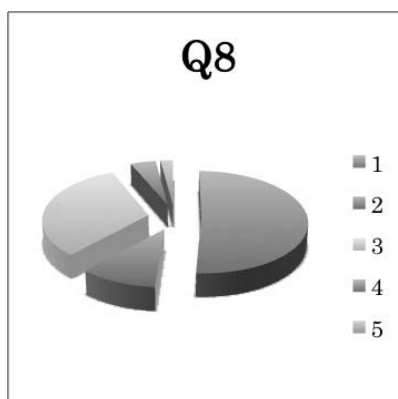
設問 8 I have a specific reason for deciding to study at university.

この設問は、大学で高等教育を受ける理由があるかどうかを尋ねるとともに、その意志の強さをはかるものである。本来の義務教育とは異なり、大学教育は自由意志で選択して受けているはずのものであるが、今日ではそうとも言い切れない。学生の高等教育への期待の変質がその根本にある。

比治山大学



イギリス

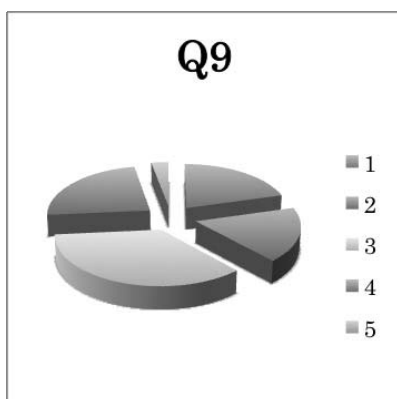


比較してみると、イギリスの学生の方がより明確な大学進学理由を持っているといえよう。異なる教育の制度に加え、大学進学率の大きく異なることも一因といえようが、高等教育は両者共に義務教育ではないので、ある程度の類似は見られて当然と思われた。しかし、回答から見ると、現実には大きく異なる。本来は大学進学に強い意志を示すべきであろう。比治山の特に強い進学意欲がないのに進学している学生の率が高いのが気になる。

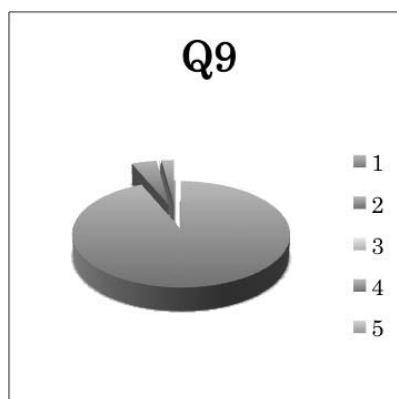
設問 9 The qualifications provided by the university are adequate.

この設問では、本来職業訓練を主たる目的とする専門学校とは一線を画したはずの大学が時代の要請に応え、学生の多様化が進んだ結果、就職と直結する社会的に認知された資格の獲得に積極的に支援している現状からみて、学生がどれほど資格獲得を大学に期待をしているのか、また、それが現状として十分であるのかどうかを尋ねたものである。

比治山大学



イギリス

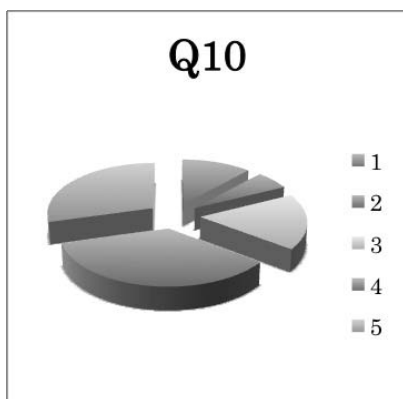


比治山の学生の不満度の高さに比べて、イギリスの学生の満足度は、極度に高いのがわかる。資格について、イギリスの学生は大学を卒業すること自体に大きな「資格」を感じていることに対して、比治山の学生は、もう少し個別な「資格」を意図しており、それがこの設問の相違に出てきたのではないだろうか。イギリスの学生が日本におけるような多くの資格を取る環境にあるとは考えにくい。

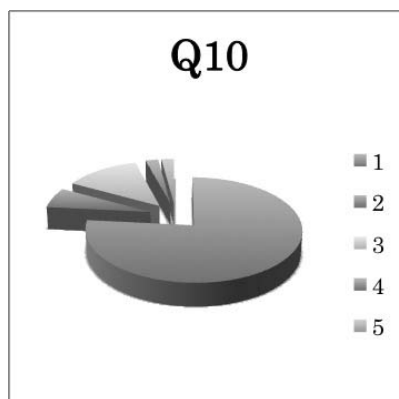
設問 10 I want to meet friends of my own age at university.

この設問は、学生の高等教育を支える学びの場で学生同士のコミュニケーションの期待度を尋ねたものである。大学が学びの場であることに疑問はないが、学生間の交流はその学びに大きく関わっている。また、ここでは、学年間の相違も考え合わせるとおもしろい。

比治山大学



イギリス

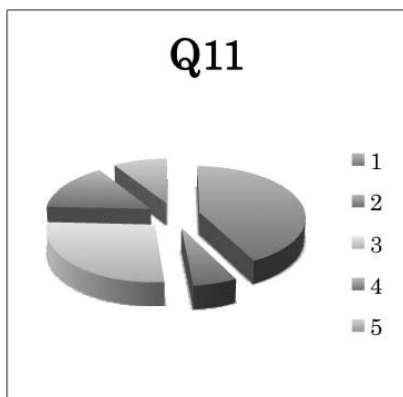


まず、イギリスが学生間のコミュニケーションに対する期待値が大きいのに対して、比治山はかなり低い。比治山はむしろ、大学外でのコミュニケーションに期待しているのではないかとと思われる。また、この回答結果を学年別に集計した結果を見ると、学年を追うごとに、期待値は低下している傾向が見られた。1と回答した学生は1年生が10名だったが、学年を追うごとにその数は少なくなり、4年生では3名になった。つまり、入学後間もない頃の学生間のコミュニケーションに対する学生の期待値は高いが、学年進行と共に、コミュニケーションの重点が量から質へと移り、入学時の程の期待はなくなったというのが現状であろうか。

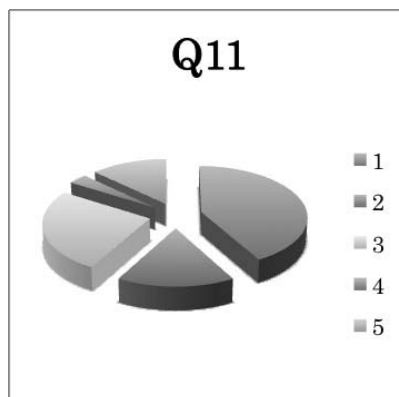
設問 11 My parents recommended that I go to university.

この設問は、学生の自立の程度を問うものであり、この自立の状態と学生の高等教育への期待と満足度がどのように関連しているかを調べれば、ある程度自立と学生の求める高等教育との間に何らかの特徴が見いだせるのではないかと期待される。その意味で、この問いは第一部の設問全般との関わり、さらには、設問 8, 9 などと関連してみることでいっそう明瞭に学生の自立と高等教育との関係が期待される。

比治山大学



イギリス

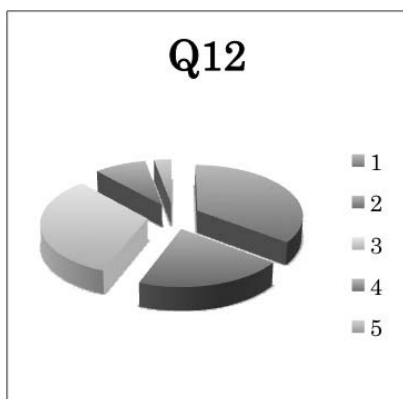


当初のこちらの予測に反して、大学進学に関する保護者の関与の程度は比治山とイギリスの間に大きな相違は見られなかった。大学進学には大きな経済負担が伴うこともあろうが、その事情もイギリスと比治山は大いに異なる。例えば、スコットランド在住の学生はスコットランドの国立大学の授業料は完全に免除されている。一方で、比治山は私立大学で保護者の支援なしには進学は難しい。そうした事情を考慮すれば、ますますこの回答結果に見られる類似性の高さは驚きである。一因としては、進路を決定する際の、親子関係が類似しているということだろうか。また、結果が類似していることから、満足度とのクロス集計の意味はなくなったといえる。

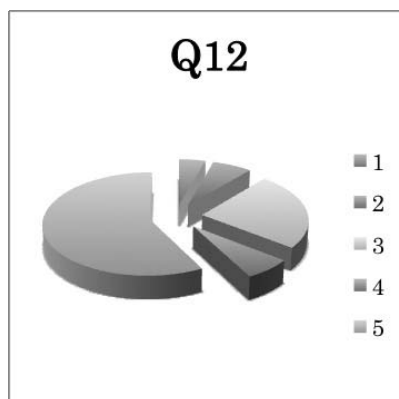
設問 12 I am studying in order to get a better reputation.

この設問は、学生の大衆化により、学生が高等教育に求めるものがより現実的に矮小化したとの一般的に想定されている図式が果たして妥当かどうかをみていく際に重要な指針となり得るものと期待される。就職や資格といった具体的な目的ではなく、とても曖昧ではあるが評判というものを学生がどれほど高等教育に期待しているかを数値化できるものとなる。

比治山大学



イギリス



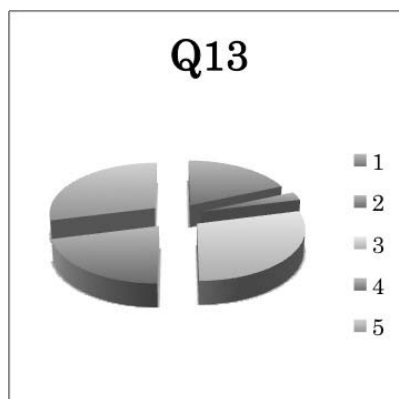
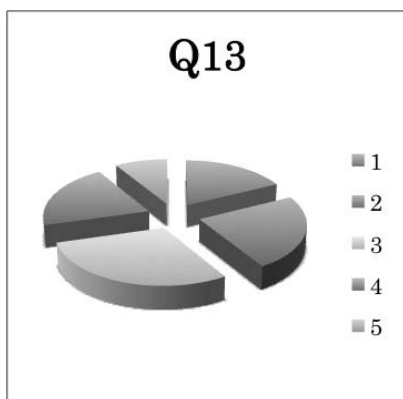
比治山とイギリスに大きな違いが見られる。特に留意すべきは、**reputation** をどうとらえるかという問題がある事だ。実際にこの概念と自分の学習の動機とを結びつけるのはあまり意味を持たないかもしれない。しかし、旧来の伝統的なイギリスの教育の中ではその大きな柱となっていた概念が比較的現在は軽んじられ、その逆に極東の日本でまだ少しその概念に対するの評価が生き残っているのは、希望的観測でもあるかもしれないが、学業が個人のものだけではなくその周りへの影響が大きいととらえる考え方がまだ、日本では生きているからなのかもしれない。

設問 13 I want to carry out my dream at university.

この設問は、学生の夢と実際に所属する大学の実情が互いに関連しているのかどうか、また、その夢の実現を図る上で、大学がどのように機能しているのかの実態を探るのが目的である。設問 5, 6 とも関連しているが、この設問の主眼は、アンケート回答者自身の意欲の度合いを的確に把握することができる。

比治山大学

イギリス



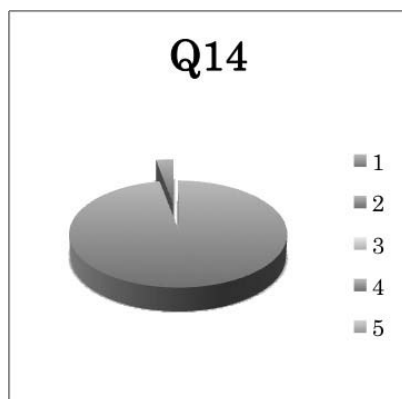
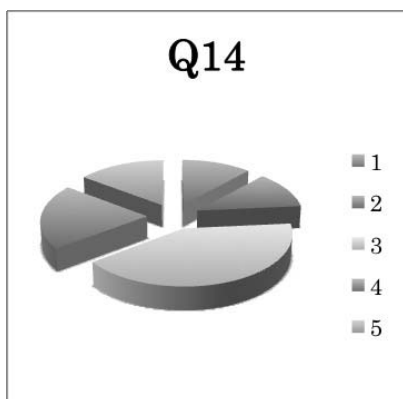
高等教育と自分の夢の実現との関連を問う質問であったが、その答えに比治山とイギリスの極端な相違は見られないと言っていいだろう。もちろん、その関係を疑問視する声が若干イギリスの方が多いのが特徴であろう。この設問と先ほどの設問 12 の問題とを関係づけて考えると、高等教育の果たす役割について比治山とイギリスの学生の考えることに、相違があることは見て取れる。この相違がどこから来るものなのかが興味深い。

説問 14 I want to gain a general education.

この設問は、一般教養についての定義にもよるけれども、一般的な学生の一般教養に対する意識と、それに取り組む意欲の度合いをみるものである。学生がどれほど大学の一般教養に期待しているのかということも同時にみることもできる。設問 37 も同様のものであるが、そこでは少し限定的なものになっているのに対して、この設問はあくまでも一般的な概念として尋ねたものである。

比治山大学

イギリス



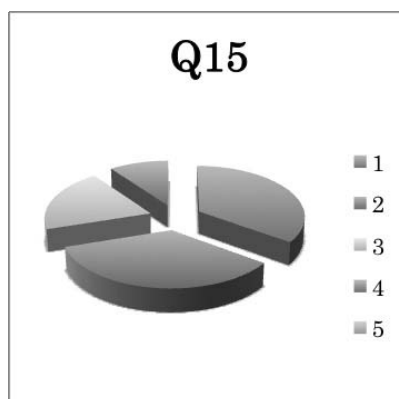
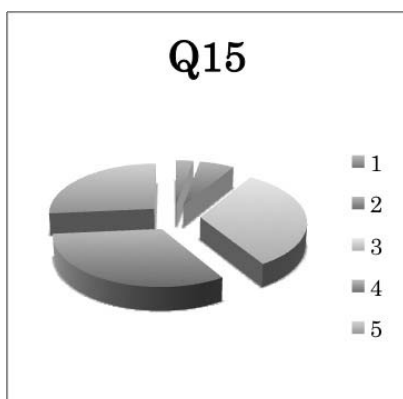
この設問に大きな相違が見られたのは、高等教育に対する一般的な概念が極端に異なっているからに違いない。具体的に言えば、大学という機関で一般教養を学ぶことが当然であると理解しているイギリスに比べて、比治山は大学教育に一般教養を求めているということが濃厚に現れている。近年文部科学省によって推し進められた専門教育重視の施策はイギリスでは常識ではないことを意味している。大学の初年次から一般教養をできるだけ簡素化し、学生の強く求める専門教育を手厚くしていくという日本の施策は、イギリスと異なっている事が明白である。むしろ、イギリスの学生は大学において一般教養も求めていることが、この結果から読み取れる。この比較結果は、我々に高等教育とは何かという問題を国の隔たりを越えて問いかけている。

説問 15 I think foreign languages are important in higher education.

この設問は、教養教育の中で、外国語教育を学生がどのように捉えているかを見るものである。むろん近年、外国語の中には人気度や、自国とその国との広範な信頼関係などが大きく影響するものであるが、ここでは、一般的にある特定の言語には限定していない。設問 7 にも同様のものがあるが、そこでは、外国語を選択する場合の具体的な要因を聞くものであり、高等教育における外国語教育の意義を問う点で、この設問はそれとは異なっている。

比治山大学

イギリス

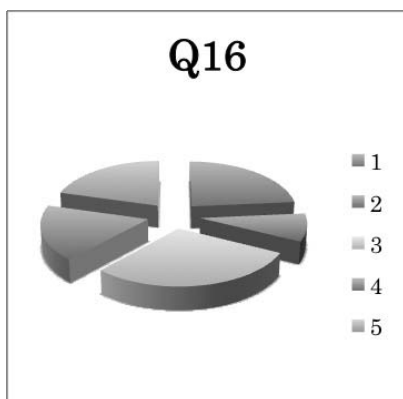


設問 14 で、イギリスの一般教養重視の姿勢が見られていたが、語学教育の重要性を尋ねたこの設問でも、やはり同様の傾向は見られると言っていい。イギリスは 3 までの回答でほとんど 8 割になる。一方で、比治山は否定的な回答が 6 割を越えている。ここから、設問 15 も設問 14 同様に、語学教養軽視の姿勢が比治山に見られるといえよう。むろん、これは比治山に限ったことではなく、日本の語学教育は少しずつ変質しており、資格としての語学を重視する傾向があると言っていい。教養としての語学教育の面は少しずつ軽視されて行きつつある。

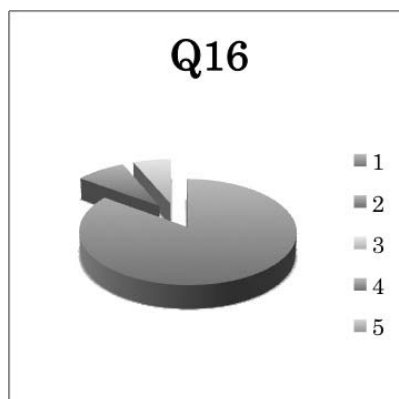
説問 16 I want to focus on my major subject.

この設問は、先の設問での一般教養と外国語教育とを問う設問の次に続く位置にあり、それらを意識させながら、こんどは専門教育に対してどの程度意欲を持って取り組んでいるのかを問うものである。むろん、専門教育を学ぶために、大学に在籍しているわけであるが、その意欲とほかの教育への意欲の関連性を問うものでもある。

比治山大学



イギリス

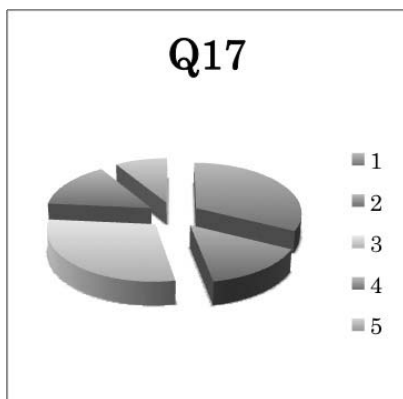


比治山は積極的な1の回答が25%にも達していないが、イギリスは1の回答だけで、8割近くになる。専門教育を得るための大学であるにかかわらず、この結果は意外であった。比治山は大学教育に何を求めているのだろうか。数問前の回答から比治山に共通してみられる姿勢がある。それは大学に教育以外のものを期待している姿勢だ。大学の進学率の大きな増加と共に、大学の大衆化が進んでこのような現象を起こしているのではないか。義務教育の初等中等教育にともしれば見受けられる消極的な学習意欲が高等教育においても継続していることをしめしている。また、大学に、教育以外のものを求めている可能性も大きい。比治山には本来の専門教育に対する真摯な姿勢があまり見られない。

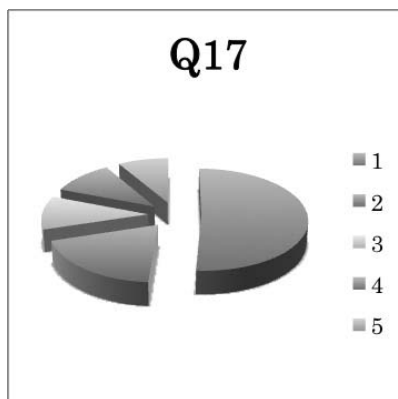
説問 17 I think it is natural to go to university.

この設問は、大学へ進学した経緯を概念的に問うものである。大学進学が当たり前の環境にあったのか、それともそうではなかったのか、また、大学進学に際してほかの進路の選択肢があったかのかどうかも窺える。

比治山大学



イギリス

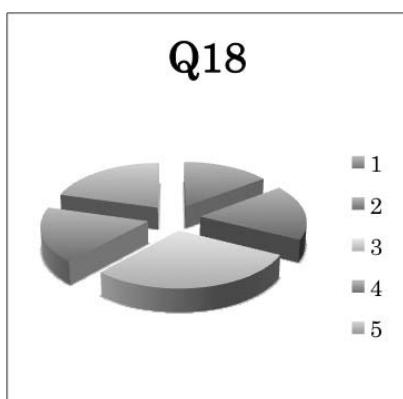


先ほどの設問の分析の結果、比治山の学生の姿勢が学問に対して受動的である問題点は指摘できたが、この設問はそれに繋がるものであり、当然大学進学率の高さから、大学へ行くのは当然と回答する学生が比治山に多いと期待されていた。しかし、イギリスにも同様な回答をする学生が多いのはこれまでの回答結果からすれば少し意外であった。そうはいつでも、この問はイギリスでも比治山でも大学生に対して実施されたものであり、このような回答する学生が多いのはある意味において順当な結果であろう。

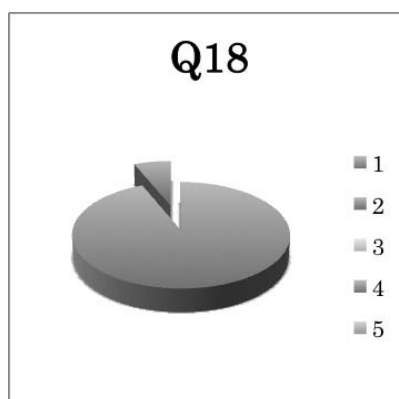
説問 18 I have something specific to learn at university.

この設問は、大学進学に対する漠然としたものを尋ねるのではなく、大学進学を決めるに至った明確な学問分野があるのかどうかを尋ねるものである。これは、学ぶものが専門科目に限定したものではないので、広く考えて、肯定的な回答が得やすいと思われる。

比治山大学



イギリス

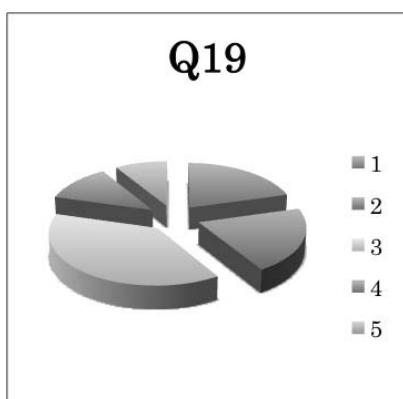


結果として、こちらの想定内の回答になったのはイギリスであり、比治山の方は意外な結果が出た。悪意を持って解釈すれば、大学には学問を期待してないとまで、言い切れる結果であることに大学関係者として失望感を少なからず味わった。比治山の学生は高等教育を大学にあまり求めていないととれるからである。では、一体何を求めているのだろうか。これは、大学の大量化の問題と併せて、考えなければならないことである。果たして、大学は今後こうした学生の要望にしっかりと答えていくべきなのか。それとも、こうした学生の興味を学問の方へとむける何らかの方策を模索すべきなのか。まさに、ハムレットのような悩みがここに実在する。

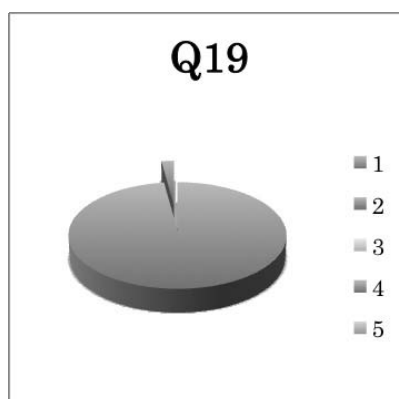
設問 19 I want to enjoy my university life.

この設問は、大学での学生生活全般に対する期待度を見ると同時に、その積極性を見る指針になる。設問 16, 21, さらに、23 などとの関連で、このアンケート対象の学生の生きる意欲のようなものを把握できる。学生生活だけに意欲を示す学生が多いのか、それともそれは他の意欲を問う因子ともどの程度関わりがあるのかも見ることができる。

比治山大学



イギリス

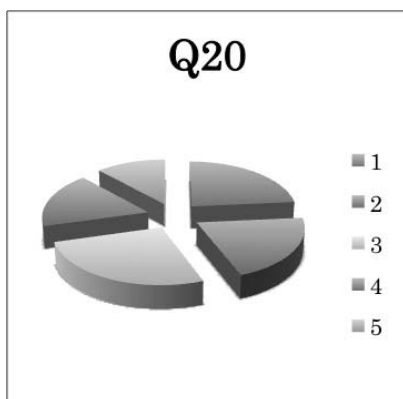


この設問は当然これまでの回答の傾向から、比治山の肯定的な比率が大きいと考えられたが、結果は圧倒的にイギリスの肯定的な比率の高さとなって現れている。これは先にも書いたが、学問への意欲の高さと比例していて学生生活も積極的に楽しみたいという学生が多いことがわかった。イギリスには、よく言われる、「よく学びよく遊べ」の精神を実践している学生が多いことがわかる。学ぶ意欲はつまり、生きることを楽しむ意欲にも通じているのである。どちらを優先すべきであるかは、鶏と卵の関係のように簡単に答えられる問題ではないが、すくなくとも、この 2 つの意欲、すなわち、学ぶ意欲と生を楽しむ意欲は比例関係を持つものだといえよう。

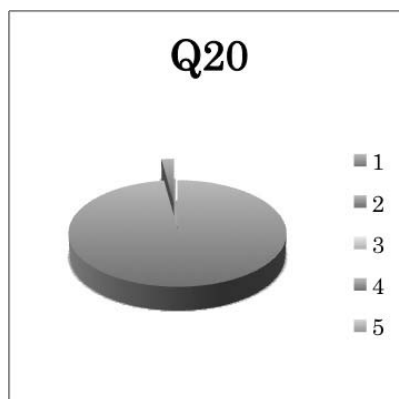
設問 20 I want to cultivate academic skills.

この設問は、一般的には学業、専門分野のスキルについての学生の意欲を問う問題である。むろん、スキルの定義をどの程度に絞るかにもよるけれども、学生の得意とする分野での当然身につけるべきスキルを学生がどの程度の意欲でもって取り組んでいるのかを探る。

比治山大学



イギリス

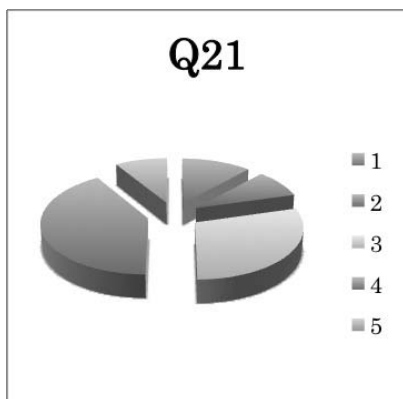


ここでも、比治山の積極的な回答の比率の低いことが気にかかる。一方、イギリスはそれとは対照的に、1の回答が9割以上となっている。この設問も、ほとんど積極的な回答が期待されるものであるにもかかわらず、比治山の積極的な回答の率はすこぶる低い。「アカデミックスキル」の解釈の違いがその一因となっているのかどうかはわからないが、これまでの設問の回答の結果から学ぶ意欲が比治山は比較的に低いといえる。

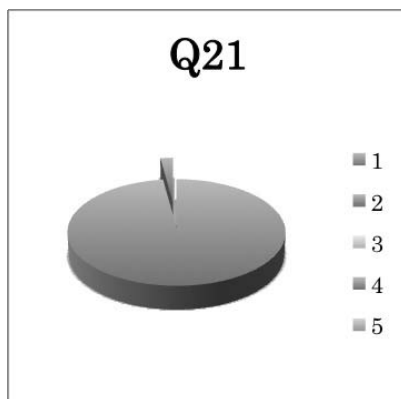
設問 21 I want to get a better academic background.

この設問は、教養教育をどの程度習熟したく思っているかを直接問いかけるものである。むろん、大学へは専門教育を期待して入学したわけであるが、その他の教養教育にどの程度の関心を持っているのかも見られる、

比治山大学



イギリス

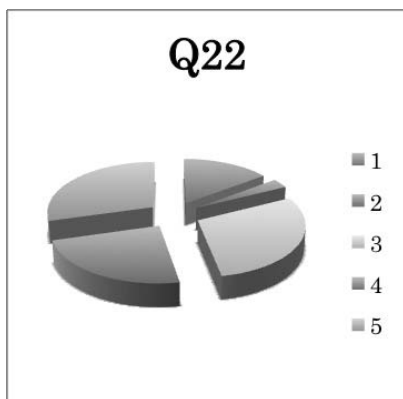


イギリスの方は、教養教育への期待値が大変大きくなっていて、1の回答が9割を超えている。一方で、比治山の回答は設問18と同じような分布となっている。設問18は、特別に大学で学びたいものがあるかどうかその意欲を問う設問だが、まさに、その設問とこれは同じようなことを尋ねたものだといえるだろう。イギリスの回答も、やはり、設問18と同じような回答の分布となっており、学生によってなされているこの回答がある程度信頼に足るものであることも示している。

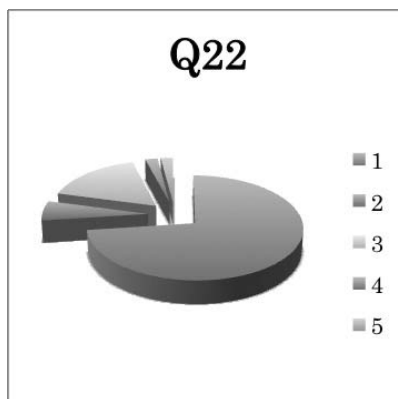
設問 22 I want to get a higher income.

この設問は、学生の大学進学のもてかかわるが、経済的な動機付けが大学進学という進路選択の際にどの程度考慮されているかを問うものである。むろん、その専門分野との関連を見ることも出来るだろう。

比治山大学



イギリス

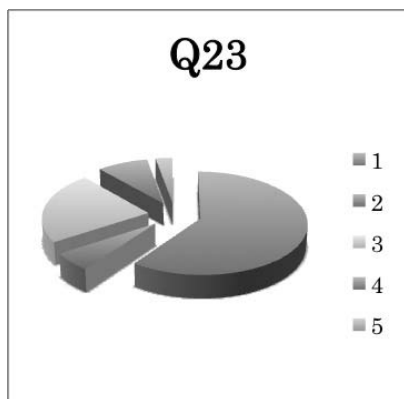


高学歴と高収入が直結しているかどうかは必ずしも簡単にいえるものではないが、大学進学のもてとしてどれほどの率の学生がこの設問に肯定的に答えるのかどうかを尋ねた。その結果として、正直なのかどうかはわからないが、ともかく、イギリスの1の回答がずば抜けて高い結果を得た。一方比治山の学生はあまり、経済的なことには興味を示していない。驚くことに、5と回答する学生に比率があまりにも、こちらの想像と異なり高い。大学卒業と高収入との関係が比治山の方が希薄だといえる。これは、現実に大学生は必ずいいところに就職できるという神話が日本ではもはや成り立たなくなっている事も要因として考えられる。

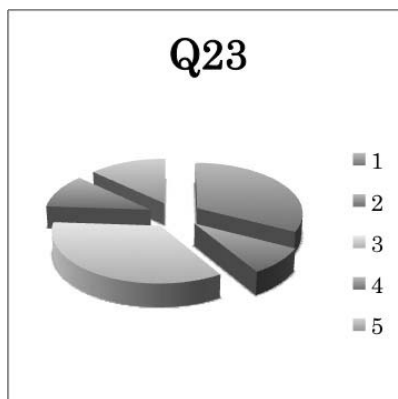
設問 23 I want to go to graduate school.

この設問は、大学院進学への意欲を問うものである。大学卒業後に、どの割合で、大学院へ進学するかを見る指標になると共に、設問 21, 22 などとの関連性を確かめることもできる。

比治山大学



イギリス



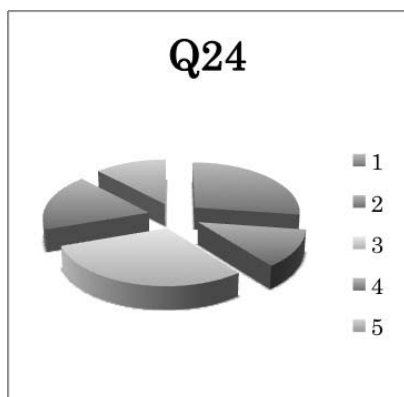
この設問の結果興味深いことは、あれほど学問への意欲の低下が見られた比治山の学生の方が、こちらの想像に反して、大学院進学を考えている学生が多いということだ。これは一体何を意味するのだろうか。一方で、あれほど学問への意欲が見られたイギリスは大学院進学を考えている学生はそれほど多くはない。大学院がどういう機関であるのか、国の事情でそれぞれ異なっていることも考えられる。イギリスの方は、大学卒で十分な専門的な知識を提供しており、それほど大学院進学の実用性がないということを示しているのだろうか。比治山の方は、大学院進学によってその専門性が一層高められることもあるが、それを希望しているのかどうかは少々疑問である。それぞれの国の大学院の担っている機能の違いも影響を与えたといえるだろう。

さて、設問 24 から 36 までは、大学での教養教育や専門教育に関するものではなく、個人的なことがらに関するものである。個人的な目標、余暇の時間など、教育内容に関するものとは違ったものになっている。こうした質問を通して、個人と学習との関係がある程度明らかになることが期待される。

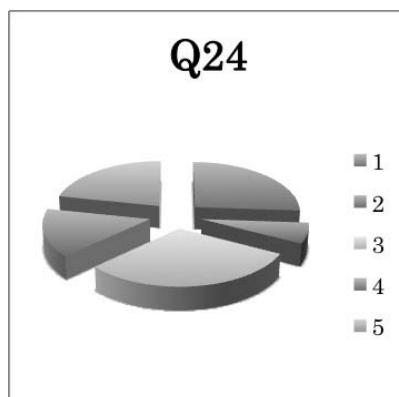
設問 24 I have a defined goal for my future.

この設問は、学生が個人的に明確な目的意識を持っているかどうかを尋ねるものである。明確な目的意識と、大学での学習意欲がどう関連しているのかを調べることが出来る。設問 13, 18 との関連で見ていくと学生の目的意識と大学進学動機が明瞭になるであろう。

比治山大学



イギリス

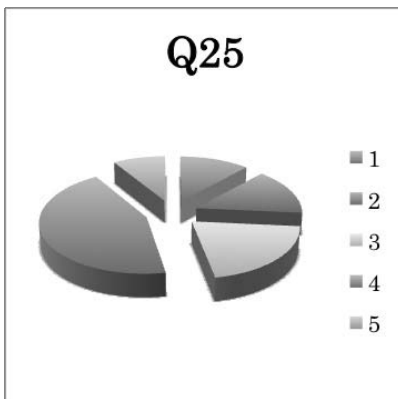


これまでの、設問と異なり、ここからは学生個人に関する設問になったが、これは、設問 8 と強い関連性を示している。しかし、比治山はその比率がほぼ同じであるのに対して、イギリスは異なっている。また、中でも特に 1 の比率がこちらでは低くなっていることが特徴としてあげられる。設問 8 との決定的な違いは、入学目的か、人生の目標かというところであり、その意味では、イギリスは大学と人生との関係は、比治山よりも離れていることが明確になっている。

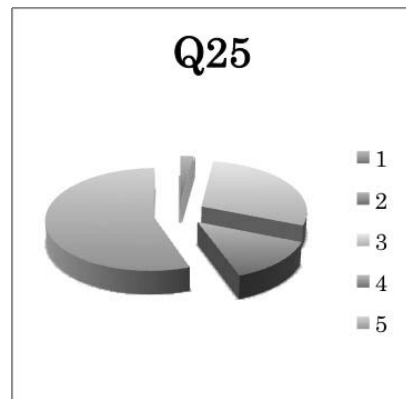
設問 25 I want to develop my personality at university.

この設問は、大学で自分の個性を生かす意欲を見るための質問である。一見、個人の個性の問題は、大学の教育とは無関係のように見えるが、実は、個性と勉学の対象や勉学意欲のあり方などとは深く関連しているといえる。

比治山大学



イギリス



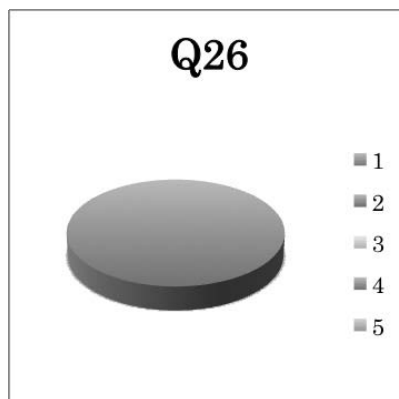
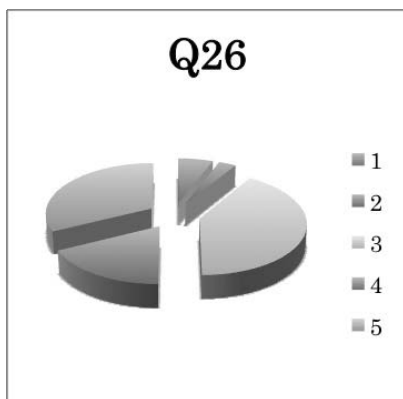
大学は学ぶ場所であるという大学の機能についての認識は共通しているが、その大学教育と人格の涵養との間に関係があるかどうかについては、むしろ、文化の違いや教育に関する考え方の違いから生じる。それが顕在化したのがこのグラフの意味するところである。教育を単なる知識の伝授ではなく、その人格の修練にまで広げるのは、儒教を中心とした日本人の特徴的な考え方がその基盤にあることは想像に難くない。

設問 26 I do not want to be a socially vulnerable person.

この設問は、大学進学が自己実現にあるとするのであれば、その対極にある自己否定的な側面に対して、どの程度の嫌悪感を抱いているのかを問うものである。社会的弱者への嫌悪感の強さは、設問 25 とある程度関連している。

比治山大学

イギリス

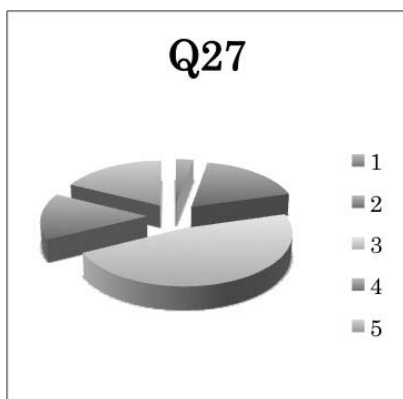


これは、はっきりと比治山とイギリスの違いが出た設問だった。社会的な弱者になりたくないという気持ちは、当然誰の心にも存在するが、それが設問という形で出たときの反応の仕方にも文化的な差異がみられる。また、自分自身をどう認識しているかにも影響される。もし、自分に少なからず、社会的な弱者の部分があるとなれば素直に、答えられないのは自明のことだろう。社会的に認められた高等教育機関で学ぶものは、競争的な社会環境の中では弱者とはいえないのだろうが、比治山では、むしろ、そうした社会的な地位と大学卒業資格というものが、必ずしも強く結びついていないことがその一因となっていることがいえるだろう。比治山のほうが大学の大量化がイギリスよりも進んでいることを示している。また、この設問の結果が示しているのは、学生が自分の立ち位置をどうとらえているかということであり、それは今後比治山の教育を考える上で大きな参考となるだろう。

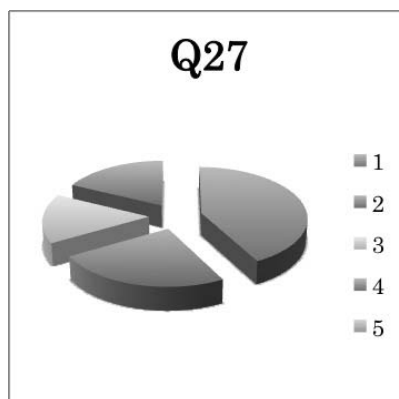
設問 27 I always do my best.

この設問は、個人の積極性を問うものである。自己実現に対して積極的な意欲の度合いを問うものである。設問 25, 28 との関連で見えていくと、個性との関連などから、具体的なものに対してではなく、一般的なものに対する個人の姿勢の積極性の度合いを尋ねている。

比治山大学



イギリス



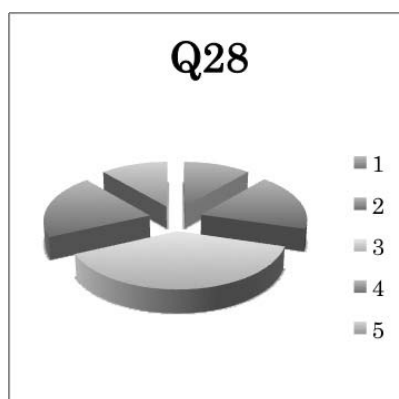
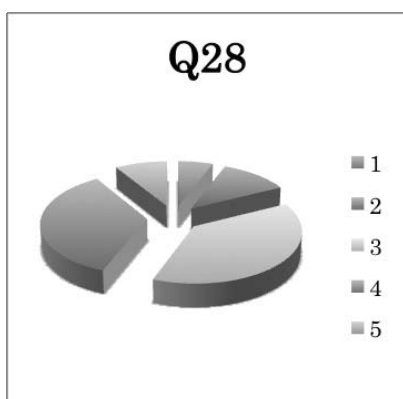
イギリスは、1と2で過半数を超えているのに対して、比治山は1と2で四分の一も超えていない。また、否定的な5と回答とした学生が比治山では2と回答した学生とほぼ同じ比率である。これは、イギリスはかなり積極的な姿勢を示す学生が多いのに対し、比治山の方はあまり積極的な姿勢が見られないことを示している。しかし、ここでも問題はやはり、実体はどうなのかだ。例えば、「いつも」ということばをどこまで厳格に定義するかで、その答えが異なってくることも十分に考えられる。ただし、それを考慮した上でも、この差異は大きすぎるようだ。これもやはり文化的土壌の差異からも生じていると言ってよいかもしれない。

設問 28 I want to serve others.

学問をすることは、とても個人的な問題であるが、その行為の中にも利他的な精神がどの程度みられるのかを問うものである。学問の目的は学習者個人の幸せにあることは当然であるが、これは他人の幸福のためにしているかどうかその姿勢のあり方を問うものである。

比治山大学

イギリス

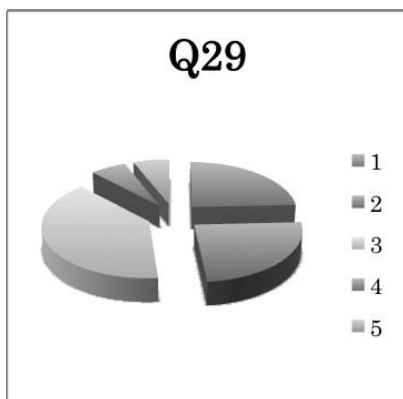


めずらしく比治山とイギリスの結果がほぼ類似していると言ってもよい。むしろ、それぞれの回答に若干の違いはあるが、その大枠での比率はこれまでの設問と比べてみると、あまり差異がないと言ってよいものである。この設問は学生の利他的な精神の程度を問うものであったが、その回答はこちらの想定範囲だった。むしろ、1の回答が多いことに越したことはないが、それだと、かえって偽善的な意味合いも生じかねない。自立をことさら求める年齢にある学生のことを考えれば、この回答が妥当ではないかと思われる。

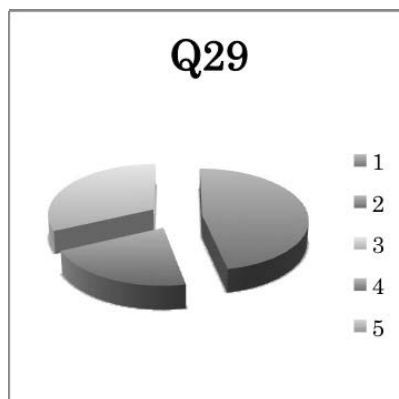
設問 29 I believe that people become competitive in society.

この設問は、個人的に競争心が旺盛かどうか、また、その程度を尋ねたものである。これは、設問 24, 26, 27 とも関連し、精神的な強さも計ることができるだろう。

比治山大学



イギリス

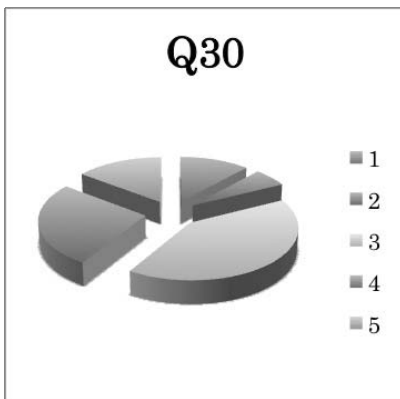


これは、学生の社会に対する認識のあり方を測る設問である。現実の社会が彼らの目にはいかに映っているのか。それが彼らの处世術にどのような影響を与えるのか。その意味で、設問 17 の回答とほぼ相関関係が見られることは、大学進学が競争社会の中で生き抜く一つの方策だと彼らが考えていることの表れだと言っても間違いではなかろう。ただし、イギリスの回答は、4 と 5 が全くないことから、社会の現実的な認識のあり方がイギリスの方がきびしいことが伺えるし、また比治山はその認識がイギリスに比べれば、甘いということになる。また、これは学生の精神的な成熟度との関連も考えられる。さらに社会情勢そのものも大きな影響があると思われる。2006 年では、イギリスの失業率が 5% 台半ばであるのに対して、日本では 4% 台前半だったことも影響しているのだろう。

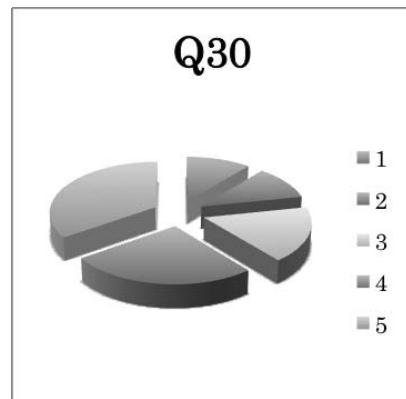
設問 30 I think my social status is important.

この設問は、経済的ではなく社会的な要因が大学に進学した動機にどの程度関わっているのかどうかを確かめるものである。ある程度、それは期待されているであろうが、この設問は大学教育にとっても大きな意味を持つものである。

比治山大学



イギリス

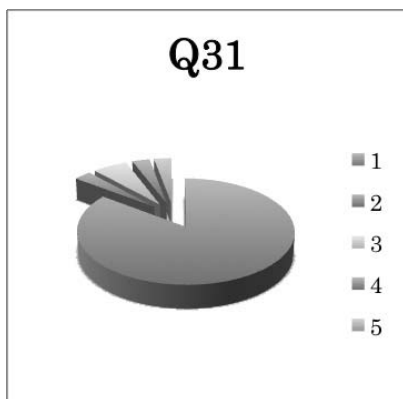


この設問は比治山もイギリスもほぼ同様な比率の回答を得た。しかも、こちらの想定よりも肯定的な回答が少ないのが実体だ。設問の主旨は、大学生として個人的にどの程度自分の社会的な地位に関心があるかを確かめることだった。結果として、社会的地位はそれほど、重要視されていないことがわかった。大学生活だけではなく、普通の生活においても、本人の充実感や達成感の方が外面的な社会的地位という価値観よりも大切にされていると理解される。

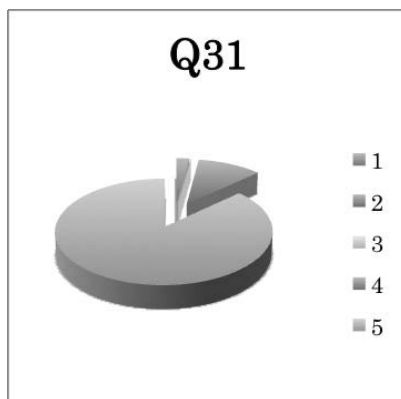
設問 31 I have changed my university one or more times.

この設問は、学生が転校の経験があるのかどうかを問うものである。学生によっては、ないものもあるであろうが、その経験がある場合とそうでない場合で、学習意欲に差が出るのかどうかを知ることも可能である。

比治山大学



イギリス

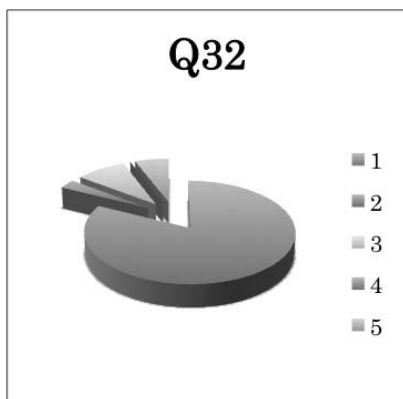


比治山とイギリスの回答がまったく異なっている。比治山が 1 の回答がほとんどであるのに対して、イギリスは 5 の回答がほとんどである。この極端な相違はどこから生じたのだろうか。理由として、この設問のあり方にも問題があったと考えられる。比治山はこの設問の意図が大学を何度も変わることが良い事であると理解し、できれば多数の大学での経験をしてみたいと言う意欲を測ったものとして読み取ったのではないか。それに対して、イギリスは設問の通り、単純に転学した経験があるかどうかを尋ねたものと理解して、このような回答になったと思われる。むしろ、このアンケートに答えた比治山の学生の中で転学した経験のあるものはほとんどいないことから、おそらく、正確にこの設問の主旨を理解していれば、おそらく、イギリスと同じ結果になったものと思われる。

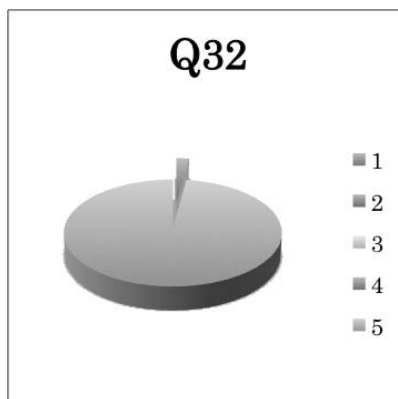
設問 32 I had attended a cram school prior to university.

この設問は、学生が塾に通った経験があるかどうかを尋ねるものである。むろん、スコットランドの学生と日本の学生とでは、教育制度や環境が大きく異なっており、大きな差が出ることが予想された。

比治山大学



イギリス

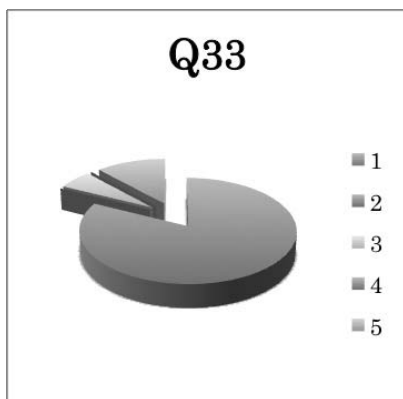


予想通りに、この設問では、比治山が 1 の回答がほとんどに対して、イギリスは 5 の回答がほとんどとなっている。これは、イギリスと日本の教育制度の違いが大きく影響しているものと思われる。むろん、これは想像されたことだが、実際にこの回答で事実であると裏付けられたという点では評価すべきである。むろん、日本では多く見られる大学予備校や塾の存在が、イギリスにはほぼ見られないことなどから、この設問自体が結果のわかったものになっている感は否めないが、それでもやはり、教育の制度上の違いをはっきりと見せつけられている回答結果になった。

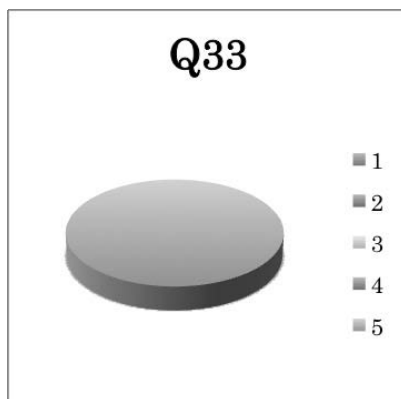
設問 33 I am a transfer student .

この設問は、学生に転入の経験があるかどうかを聞くものである。設問 31 と併せて考えるといいが、こちらの設問は、それとは異なり、学校に対して問題があったというよりもむしろ、勉学目的が変わったかどうかを尋ねるものとなっている。

比治山大学



イギリス

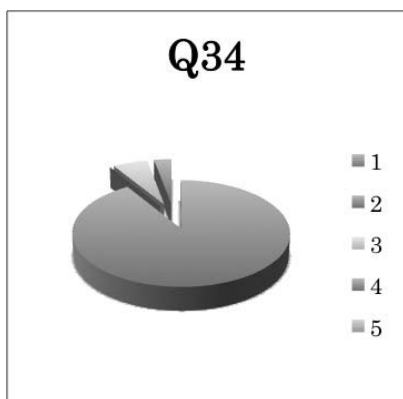


この回答も、設問 31 と同様に、本人の経験をただしている質問であるのに対して、比治山の回答は、編入したいのかという本人の希望を問う設問と解釈して回答した学生が多数いるものと思われる。なぜなら、回答者はほとんど編入経験の全くない学生だからだ。こういう回答になった理由は、回答者が設問の主旨をよく把握していないからであろう。一方、イギリスはおもしろい結果が出ている。むろんアンケートを採った学生には限定されるが、その中には誰も編入生がいないことがわかった。編入制度はイギリスでは一般的ではないのだろうか。

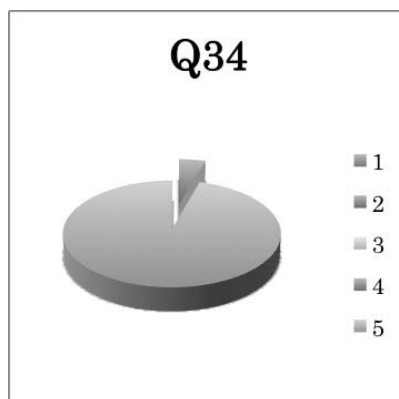
設問 34 I have changed my major one or more times.

この設問は、学生の専門分野に変更があったかどうかを聞くものである。設問 16 や 18 など大学入学以前から抱いていた興味に変化があったかどうかを確かめることが出来る。また、興味が変わりやすいことと学習意欲との関連も調べることが出来る。

比治山大学



イギリス

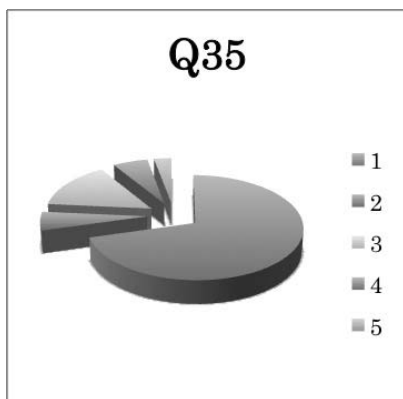


この設問の回答も比治山とイギリスでは大きく異なっている。比治山では 1 の回答が、イギリスでは 5 の回答がそれぞれ多数を占めている。しかし、専門を変えることは、その学科コース内でも多くみられない比治山で何故こんなに回答 1 が多いのかは理解できない。むしろ、設問 31 や 32 同様に、比治山は設問の意図を誤解している可能性が高い。比治山は、できれば、実際はできないにしても専門を変えたいと思っている学生が多いと見た方が妥当な解釈といえるだろう。

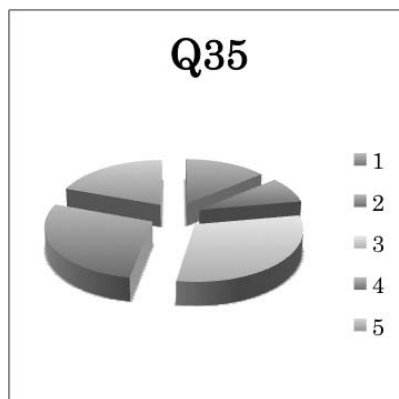
設問 35 I am interested in math and science subjects.

この設問は、大学での専門が理系であるかどうかを問うものである。専門分野に関する設問と併せて考察することになるが、理系に特有なものが出てくるかどうかに興味深い。

比治山大学



イギリス

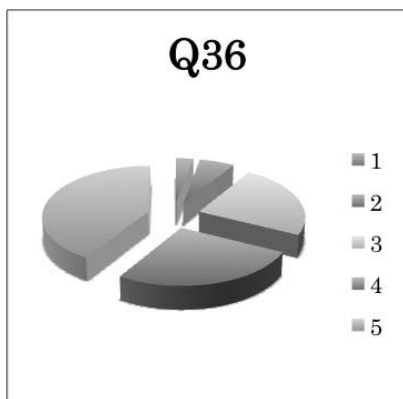


比治山の回答はすべて文系の学生のものであり、5の回答が圧倒的多数を占めると考えられたが、実際は、逆に1の回答の学生が大半を占めた。イギリスの回答者もほとんど文系と考えられるが、回答は比治山と異なり、こちらは想定通り、1と回答するものより、5と回答する学生の方が多かった。文科系の学生であるにもかかわらず、理数系の科目に興味を持つことは決して悪いことではない。その意味で比治山の回答は問題ではないかもしれないが、イギリスとは著しく異なる結果が生じた原因を考えると、教育制度の違いも念頭に置かねばならない。近年日本の理数教育の水準は比較的周辺諸国に比べると低下していると伝えられているが、学生のレベルでは、理数科目への興味はイギリスに比較すると高い結果になっている。

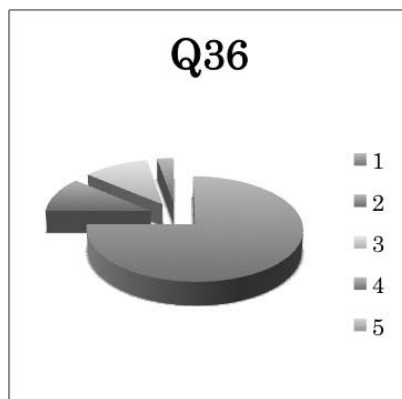
設問 36 I am interested in liberal arts.

この設問は、大学での専門が文系であるかどうかを問うものである。専門分野に関する設問と併せて考察することになるが、文系に特有なものが出てくるかどうかに興味深い。

比治山大学



イギリス



直前の設問 35 では、比治山は文科系の学生としてはあまり当てはまらない結果を得たが、この設問では、文科系の学生へ文化系の教育への関心度を問うものであるため、当然 1 と回答するものが多いことが期待されていた。しかしながら、比治山の実際の回答は 5 が三分の一を占めている一方で、イギリスは、想定されるとおり、1 の回答が四分之三を占めている。この設問で興味深い点は、比治山の 5 の回答が多すぎることだ。ある程度興味を持たない学生も存在することは想像に難くないが、ここまで多いと、一体なぜ文系の学部を選んだのかと質問したくなる。また、比治山とイギリスの回答の比率が、全く異なっている点も注目し値する。これは、学習意欲を尋ねた設問 16 の比率とある程度似通っており、その意味では学習の対象と興味の対象が一致する方が当然意欲も高いことを示しているといえる。

ここからは、イギリスの記述式の回答結果となる。

設問 37. What is the most important subject in general education at university to cultivate your character?

大学で自らの人格の形成を高めるために最も役立つ一般教養の教科名を尋ねたところ、哲学が圧倒的に高い 28%であり、芸術とスポーツがそれぞれ 15%、文学が 8%と上位を占めた。その他は、音楽、科学、宗教、心理学、言語学、経営学などの教科名が見られた。こちらの予想と異なったものとして、宗教や心理学等が比較的低い回答率であった事である。むしろ、学生個人の事情や大学で当該学科を担当している教授陣の有り様も影響を与えてくる事は事実であるが、このアンケートの大きな成果にもなるだろう。

設問 38. What is the most important subject in general education to get a job?

就職に最も有利な一般教養の教科名を尋ねたところ、52%の回答率で数学が圧倒的の首位だった。続いて、28%で科学だった。この結果は回答した学生の個人的な要素、その専攻や得意とする分野などにも影響を受けたであろうが、数学が仕事と結びついているというのは、アンケートを実施する前にはあまり予想できなかったものであった。

設問 39. What is your favorite subject in general education at university?

最後の項目として、最も好きな一般教養の教科名を尋ねたところ、回答の多い順に並べてみると、音楽、フランス語、体育、スペイン語、言語学、芸術、中国語、文学、哲学、心理学、歴史学、考古学、心理学などであった。残念なことに日本語もしくは日本文学が含まれていなかった。明治以来アジアの中では、スコットランドと一番交流の長い日本への興味はもはやなくなってしまい、それに変わるものとして中国語が含まれている事実は日本人のアンケート実施者として重く受け止めねばならないと思う。

今回のアンケートの総括

これまで、大学での教養教育、外国語教育、さらに、専門教育に関する設問をして、記述式はイギリスのみのもの、また選択式は比治山とイギリスの回答の両方をそれぞれ比較してきた。比治山の記述式がないのはアンケートの時間が短く答える時間が足りなかったこと、また、英語の設問に戸惑ったなどの理由が考えられるが回答がなかったからである。しかし、おおむね回答したものが、全員大学生であること、さらに、その回答が比較的に真摯に行われている点では、研究の対象として問題はないと見ていだろう。設問自体にも問題はあがるが、とりあえず、これまでの回答に対して比治山とイギリスを比較しながら、考えられることを述べてみたい。

まず、第一には、大学という機関の社会的機能の相違が明らかになったのでないだろうか。それは、学問の場として、揺るぎない地位を獲得しているイギリスと異なり、「大学の大衆化」ということばから想像されるとおり、比治山では学問の府という機能が希薄になっていることだ。大学は学ぶところではなく、なにか自分に有益なことを、これは学問に限定したことなく、大きな意味の人生勉強をする場としての機能を学生が強く比治山にもとめていると感じられた。

第二に、教養教育も外国語教育も、専門教育もそれを学ぶ意欲が高いものが互いに比列しているということだった。学ぶ対象の学問の種類とは関係なく、学ぶ意欲というのは、その対象がどのようなものであれ、共通して高い意欲の学生と、低い意欲の学生がいることは、今後大学が提供する学問の種類にかかわらず、意欲のある学生はすべての学問に対して高い意欲を見せる傾向があるということだ。また、これは他の意欲とも、つまり人生を楽しむ意欲や他人と交わりたいとするコミュニケーションへの意欲とも共通していた。

第三には、大学教育と保護者の関係が明らかになった。従来、イギリスの学生は日本の学生と比べて、自立しているように見え、進学に関しては両親の意向とは独立していると考えられていたが、実は、日本と同様の影響力と関係を持っていることがわかった。むしろ、経済事情の相違など、その他の条件の違いがあることは想像されるが、それにしても、こちらの想像していた以上に、イギリスの学生の進路に関する保護者の意向の影響は大きいことが判明した。

結局、こちらの予想とは異なり、学生たちの実態はこうしたアンケートの調査によらないと把握できない。また、事前の予想はアンケートの回答結果の前に無力であることも証明された。このアンケートにより、大学の機能など大学改革を進める上で重要な課題が存在していることも示されたといえよう。